

発見!

おごおり遺産

辻札 つじ ぶだ

No.33

市内各地に立てられている、竹に挟まれたお札。いつ・誰が・何のために立てるものなのでしょう。



令和4年5月号の「発見!おごおり遺産(No.29風旗)」でも紹介しましたが、田植えが終わった後、その疲れを癒やす期間を「サナポリ」と言います。

「サ」とは田植えを司る神のことで、春になると山から村々へ降りてきて、「サの神(田の神)」として田畑に恵みを与えてくれます。その「サ」が田んぼから「ノボル」(出る)ので、田植えが終わった後のことを「サ」+「ノポリ」=「サノポリ」、転じて「サナポリ」と呼ぶようになったと言われています。(「早苗振(サナエブリ)」が訛ったという説もあります)

そんなサナポリですが、その期間中、地域や家庭によってさまざまな行事が行われています。今回紹介する辻札のいくつかは、市内で地域のサナポリ神事の一環として行われています。

辻札とは、辻(道が交差しているところ、路

上そのものなど)に立てられる札です。村の境や道の辻、橋、峠などは、古くから特別な場所と考えられていたため、そこから内へ悪いもの(疫病や悪鬼など)が入り込まないように、道祖神や塞の神を祭ったり、石敢當(イシガントウ、セキカントウなど)や猿田彦大神を立てたりしていました。辻札も、それらと同じように、悪いものが入ってこないように立てられるものです。

辻札は、福童や大板井、松崎、赤川など、市内のいたるところで見ることができます。毎年6〜7月ごろ、サナポリ神事や夏越神事の一環として、地域の人がお祓いを受けた札を立てて回ります。札には「疫神齋 大己貴命 少彦人命 安鎮給」という文字や、地域の神社名が書かれていたり、札の代わりに御幣を挟んでいたりと、地域によってさまざまです。

立てられた辻札は、翌年立て替えられるまで、その場所で地域を守り続けます。散歩している時などに、竹に挟まれた紙を見かけることがあるかもしれません。その時は「健康に過ごせますように」と願って神事が続けられてきたことを、少しでも思い出してみてください。

問 文化財課文化財係 ☎ 75・7555



松崎の辻札



小板井の辻札



平方の辻札